

人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点	学校全体として人権尊重の視点に立った学校づくりが組織的かつ効果的に進められている実践事例
-------	----------------------------------------------

1. 基本情報

○都道府県名及び市町村名

岩手県大船渡市

○学校名

大船渡市立末崎中学校

○学校のURL

なし

2. 学校紹介

○学級数

【通常の学級】全学年1学級、【特別支援学級】1学級、【合計】4学級

○児童生徒数

【全児童生徒数】91人（平成27年10月1日現在）
（内訳：1年34人、2年27人、3年30人）

○人権教育開発推進事業、人権教育研究推進事業実績（実施年度及び事業の別）

平成27年度人権教育研究推進事業人権教育研究指定校

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校の教育目標】

かしこさ やさしさ たくましさ きびしさ をあわせもつ生徒の育成
「かしこくあれ 心豊かであれ たくましくあれ きびしくあれ」

【人権教育に関する目標】

自分と他者をともに大切にする生徒を育成する。
様々な人権問題について正しい認識を持ち、人権尊重の実践的態度を育成する。

○人権教育に係る取組一口メモ

教育課程内の諸活動を人権教育の視点で見直し、それぞれの存在を認める活動を通して、自分と他者を共に大切にする生徒の育成を目指す。

○人権教育にかかる取組の全体概要

本校は、かかわり合いやそれぞれの存在を認め合う活動を通して、自分や他者の存在を認め大切にしようという思いやりのある生徒の育成を目指している。人権教育全体計画を作成した上で、研究部や人権教育担当、生徒会担当、学年担当の組織を生かし、これまでの活動を人権教育の視点から見直して教育活動を推進した。

- ・生徒会担当：日常の生活を確認する生徒会活動としての「3S運動」、上級生が下級生を指導する運動会取組における「縦割り活動」、地域と関わる「ボランティア活動」を推進した。

- ・人権教育担当：外部講師を招いての「人権講演会」や「人権月間」を設定した。
- ・研 究 部：授業でのグループ活動の工夫などの研究に当たった。
- ・各学年の担当：総合的な学習の時間では、意図的に接客指導や販売体験を取り入れ、人とのかかわりを意識した活動に取り組んだ。

3. 特色ある実践事例の紹介

1 取組のねらい

教育目標に掲げる「心豊かであれ」を受けて、目指す生徒像を「自分を大切にするとともに他の人を大切にする生徒」とした。

保育園から同一の集団で生活し、人間関係が固定化されている本校生徒にとって、これからの10年、20年先の生徒の将来（自立、協働、創造）を考えたとき、様々な教育活動において、他者と関わる場面を意識的に設定し、自他の良さを学び合い認め合うことにより、それぞれの存在を認め大切にしようという思いやりのある生徒の育成につながると考えたからである。

2 実践事例

(1) それぞれの存在を認め合う活動

① 運動会縦割り活動

ア ねらい 運動会における競技練習や応援活動の紅白の組団活動を通して、縦割り学級の団結・友情を深める。

イ 内 容 3つの学年が縦割りで紅白の組団を結成し、それぞれが競技・応援等の練習計画を立て活動を行った。教師側は、活動の時間を保障し、人と人とのかかわりを意識してリーダーによる計画づくりやそれぞれの学年の思いや立場・かかわりについて話すなど、生徒の主体性を大切にして支援した。生徒の活動計画をもとに組団活動を進め、組団の勝利や応援賞・ベストグループ賞などを目指した。

ウ 考 察 運動会終了後の3年生のリーダーから下級生へのメッセージに、「運動会で最後までついてきてくれてありがとう！ 優勝できて良かったです。来年は4連覇頼んだぞ！」、「いろいろと小道具とか手伝ってくれてありがとう。頼りなくてごめんね。来年は絶対優勝してね。」などの記述が多く見られた。

上級生と下級生がかかわるこの活動を通して、上級生のリーダーシップの発揮場面や下級生のフォローアップが見られた。また、上級生に存在感や自己有用感を持たせるとともに、下級生への思いやりの気持ちを持たせることができた。

② 人権をテーマにした演劇への取組

ア ねらい 生徒の自主的な活動を促し、積極的に協力する態度や実践力を養うとともに、いじめ問題を通して人権への意識を高める。

イ 内 容 演劇の内容として人権にかかわるテーマを設定した。脚本集の作品を参考に、演劇リーダーと担当教諭の話合いによって構想をまとめ、脚本とした。生徒は、演技指導や脚本の内容についての理解を

深め、観客に訴えかける演劇を上演した。どのようにしたら伝えたいことを表現できるかなど、演劇リーダーが中心となって、話し合いを重ね、脚本の手直しをしながら取組を進めることができた。

ウ 考 察 生徒の感想には、「劇では団結して取り組むことができて良かったです。そして、いじめの残酷さや協力することの大切さを学ぶことができたので良かったです」「私は監督を希望しました。本格的な取組が始まると、役決めで悩むこともありました。練習では自分が何もやっていないような気がして本当に必要なのかと思った時もありましたが、みんなの気持ちが高まっていくにつれ、やっぱりちゃんと自分も必要なんだと思えてうれしかったです。本番では、みんなを感動させることができ、泣いてくれる人もいたので、達成感でいっぱいでした。みんなへの感謝がここまで大きくなったのは初めてでした」というような内容が多く見られた。



劇を演ずる3年生

この活動を通して、演じた側のやり遂げた充実感や感謝の気持ちを持たせるとともに、見る側にもいじめの問題や相手を思いやる心の大切さについて考えさせることができた。

③ ワカメ販売体験及びそれに向けた接客講習会

ア ねらい 接客・販売の心構えを学び、実習を通して他者とのかかわりと自分の役割を自覚し、全員で協力して行うことの大切さを理解する。

イ 内 容 講習会は大手コンビニエンスストアの協力を得て、「商品のことを知る」、「販売のポイント」、「接客」などの指導を受けた。売る側のマナーだけでなく、買う側の気持ちも考えさせ、手書きPOPの作り方や笑顔の作り方、あいさつと声かけ、ペアでの販売練習を実習として組み込み、販売の接客マナーを学び、実際に販売できた。



販売実習の様子

ウ 考 察 お客様とのふれあいを通して、あいさつのポイントや人とのかかわり方、協力して活動する喜びなど多くを学ぶことができた。

(2) 学習において他との関わりを意識的にしくむ活動

① 授業研究会の充実

視点を絞ってのワークショップ型の授業研究会を開催した。英語の授業では、それぞれの存在を認め合う活動としてペア学習を取り入れた。理科の授業では、グループ活動の在り方を中心に協議をした。ペアやグループ活動の生かし方や配慮事項などについて研究し、生徒の関わり合いを深めた。

② 市販の検査を用いた学級分析

夏休み中に分析を行い、その結果を全職員で確認し、学級担任だけでなく、学校全体で組織として2学期の指導につなげた。

(3) 人権を扱う道徳授業（内容項目2(5) 相手の思いを生かす広い心）

① 第2学年 資料名「発車、オーライ！」〈中学生の道徳2年 学研〉

ア ねらい 乗務員や乗客のとしたそれぞれの行動に共感し、相手の立場や意見を尊重し、お互いの気持ちを生かせる広い心を育てる。

イ 内容 扱った資料は、間違えて特急バスと知らずに乗ってしまったおじいさんに頼まれた乗務員が、規則に従って運行する乗務員の責務を果たすため、いったんは断るところから始まる。しかし、困り果てたおじいさんの気持ちや、周りの乗客への配慮、また乗務員としての責務を考えた後に、規則で停車することができないところではあるが、ブレーキテストということで停車し、降ろしてあげる。人それぞれの立場を理解し、それを生かすための広い心が育つよう、乗務員の行動を共感的に学ぶ。

ウ 授業の概要 導入で一つの絵を示し、同じ絵を見ていても見る人によっては違うものに見えるところから、見る角度や視点によって、見え方が違うことに気づかせて、価値の方向づけをさせた。展開では、二分割で資料を提示し、前半では乗務員がおじいさんの頼みを断り運行を続けるが、車内には乗務員を責めるような雰囲気や漂い始めるところまでにした。乗務員の立場や葛藤に共感させながら、ネームプレートを活用して自分の意思表示をさせた後、グループでの意見交換と全体での意見交流を行い、自分の考えを伝えると同時に、他者の考えも聞きながら考えを深めさせた。後半部の資料を示し、乗務員のとした行動や車内の雰囲気、いつまでもバスに向かって頭を下げているおじいさんの気持ちについて考えをまとめさせた。



道徳の授業の一場面

エ 考察 生徒の感想には、「無理なお願いでも、聞いてあげたい、かなえてあげたいという優しい心を持つ人になりたい。たとえ実現できなく

でも、相手を考えるということが大切だと思った。」「予想していなかったことが起こっても、自分の仕事や立場に責任を持ち、周りを見て行動したり、周りの人を思いやったりできるようにしたい。」とあった。相手のことを考えて行動することや優しい心・広い心について考えさせる機会になった。

(4) 3S運動を含めた生徒会活動の充実

① 3S運動の取組

- ア ねらい 生徒会活動を通し、主体的に自分たちの生活の見直しを意識する。
- イ 内容 生徒会執行部の活動方針に盛り込まれた活動で、「いじめをしない」「させない」「信頼感」を3Sと表し、いじめに対しての意識やお互いの信頼感を高める活動を行った。生徒総会での承認や呼びかけポスターの廊下掲示、学級生活の振り返り等を行い、いじめの防止や学級の信頼感を高めることにつながった。
- ウ 考察 生徒会の振り返り（生徒総会前期反省）では、毎月「生活振り返り用紙」を活用して、学級ごとに3つの「S」が達成できたか振り返ることができた。掲示物を目につくところに掲示し、前を通るたびに「3S」への意識を持たせることができた」と総括されていた。自分たちの生活を自分たちで意識して改善していくことにつながった。

② ボランティア活動への取組

- ア ねらい ボランティアへの参加意欲を高め、相手の立場に立って行動する。
- イ 内容 生徒会の専門部である生活委員会（ボランティア活動も担当）を中心に、全校から希望者を募り近隣の学童保育とデイサービスを訪問した。利用者とのふれあい・レクリエーション活動や簡単な手伝いなどのボランティア活動、プランターへの花植え活動を行った。
- ウ 考察 生徒会からは、「活動を通してボランティア活動について考えることができた」という成果が出された。教師が人権教育の視点から活動を見直し、ねらいに沿って意図的に機会を設定することで、生徒が主体的に考える良い契機となった。

(5) 人権についての学習機会の設定

① 人権講演会の開催

- ア ねらい 様々な経験を積まれた講師から、経験をもとにした講話を聞き、自分の生き方や人権に対する考え方を深める機会にする。
- イ 内容 人権問題について落語を交えて講演を行っている切磋亭琢磨氏を招き、『笑って考えよう！ 身近な人権』と題し全校生徒を対象にお話しいただいた。

講演では、落語の落ちの話から落語の魅力を感じさせる話術で楽しい雰囲気の中にも、かつて1年間に2名の教え子を亡くした経験や奥さんをみとった経験を交えての「命の大切さ」、さらには「子供

のいじめ」など身近な人権問題について話された。後半に話された「命の大切さ」について多くの生徒たちの印象に残ったようであった。さらに、夜にはPTA講演会として、小中学校の保護者対象にも人権についてお話しいただいた。

ウ 考 察 生徒の感想には、「命の大切さがどれくらい大切かよく伝わってきました。相手のことを大事にすることなども教えてもらいました。」など、命の大切さについての記述が多くあり、人権や命の大切さについて考える貴重な機会にできた。

② スクールカウンセラーを活用した学級づくりのための授業

ア ねらい スクールカウンセラーの協力を得て、グループ活動などを通して学級づくりや学級生活向上につなげる。

イ 内 容 学級活動の時間を活用し、スクールカウンセラーによる授業を行った。「気持ちの良い声かけを考える」「人が仲良くするとは?」「思春期を科学する」「ストレスの解消」などを内容とし、気持ちの良い声かけ練習帳などで実際に書き出してみたり、アイスブレイキングの手法を用いてのグループ活動を展開したりするなど、生徒が楽しみながら取り組める内容が多かった。

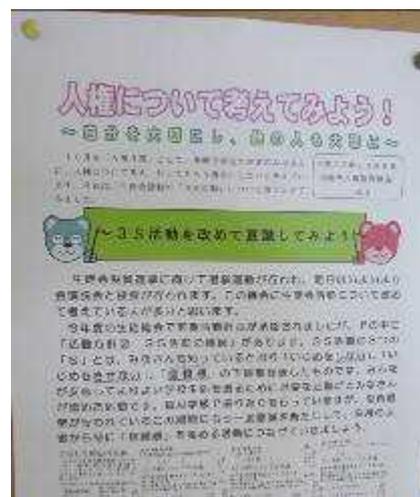
ウ 考 察 学級担任とは異なった立場の人から教えてもらうことにより、人とのかかわりについて新たな視点をもつことができた。

③ 人権啓発プリントの発行

ア ねらい 人権について生徒一人一人に考えさせる機会の設定により、人権について理解を深めさせる。

イ 内 容 人権月間(10月)を設定し、人権にかかわる内容を取り上げ、印刷して生徒への配布や校内掲示を通じて意識啓発を図った。学級担任は、朝の会や帰りの会の時間においても意識して人権に関わる話題を話すこととした。

ウ 考 察 人権について考える機会を設定し、内容を焦点化したプリントを発行した。生徒がプリントを読み、人権について考える機会になった。



人権啓発プリント

④ 人権作文への取組

ア ねらい 人権学習や諸活動を通して学んだことを自分の生活と結びつけて考える機会にし、人権尊重への意識を高める。

イ 内 容 人権問題についての生徒の考えをまとめさせるため、社会科での人権の学習とも関連させ、全国中学生人権作文コンテストへの出品に取り組んだ。

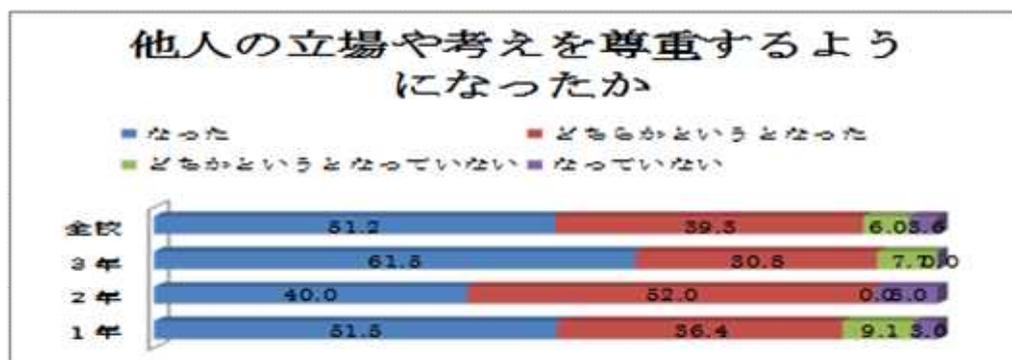
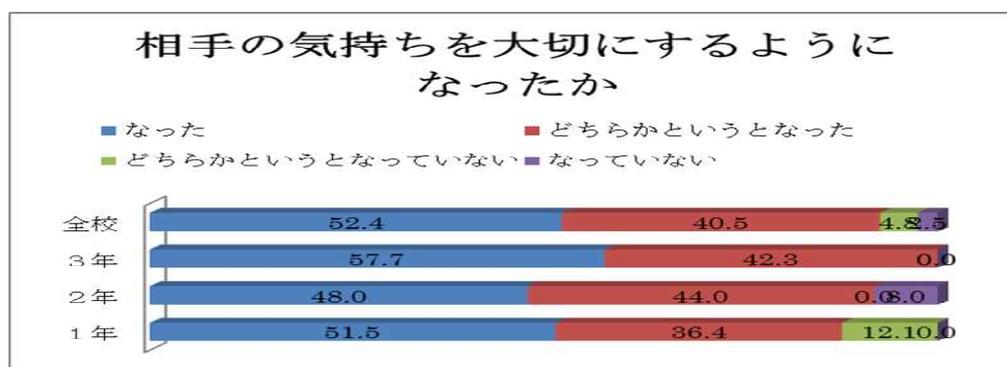
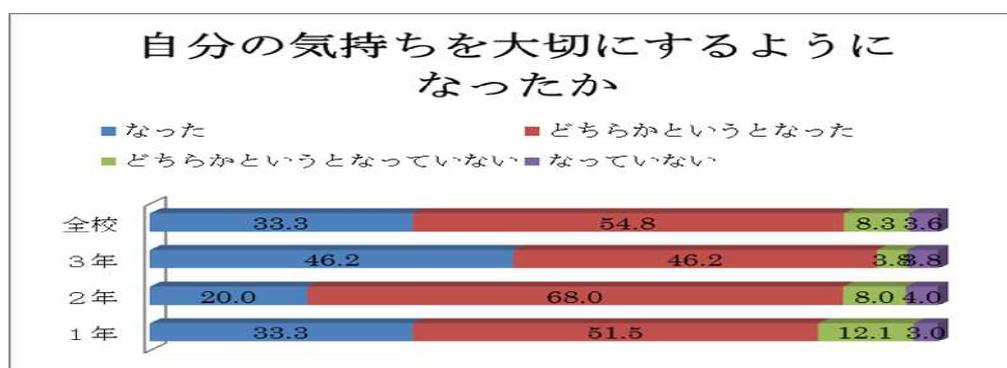
ウ 考 察 一つ一つの作文が、人権の様々な問題についてしっかりと考えられた内容となっており、岩手県大会で入賞する生徒もいた。

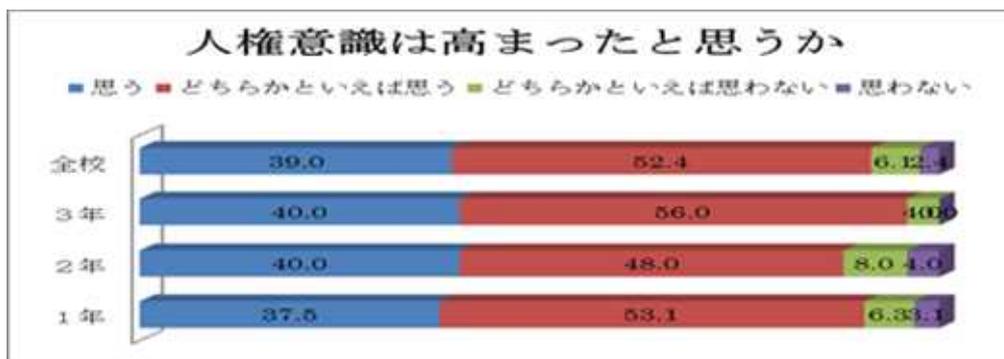
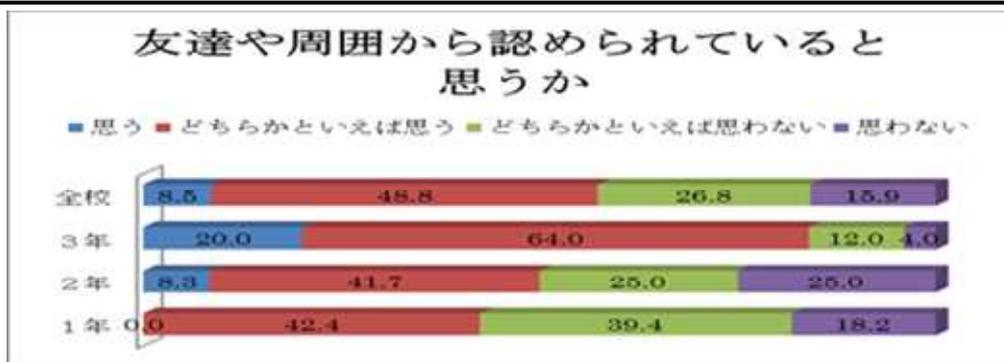
4. 実施する際に生じた課題及びその解決策

人権教育に過去に取り組んではいたものの、人権教育についての教師側の認識不足があり、学習が十分とはいえない状況からのスタートであった。そのため、人権教育の基本的な考え方や内容の学習から取り組んだ。人権教育の全体計画を作成し、年間指導計画を人権教育の視点から考え、これまで行われてきた諸活動も人権教育との関わりから見直した。人権というフィルターを通すことで、これまでと同じ活動であっても、教師も生徒も人権を意識しての活動になった。人権教育として行ってきた様々な活動を通して、知識として知っていたものでも、実生活での言葉遣いや接し方などについて改めて気づくことができた。

5. 実践事例の実績、実施による効果

(1) 取組の評価（生徒の意識調査より 実施日：平成27年11月16日）





「自分の気持ちを大切にできるようになったか」の項目では、肯定的な割合が8割以上を占めた。「相手の気持ちを大切にできるようになったか」「他人の立場や考えを尊重できるようになったか」の項目では、ほぼ9割の生徒が肯定的な回答である。このことから、自分を大切にし、他者も大切にしようとする気持ちが以前よりも高まっていることが感じられる。また、「人権意識は高まったか」の項目についても肯定的な割合が全学年とも9割を超えた。人権をテーマにした演劇づくりの取組や人権講演会などの人権について学習する機会や人権啓発の機会を意図的に設定して取り組んできたことにより、生徒の意識が高まったのではないかと考えられる。

一方、「友達や周囲から認められていると思うか」の項目では、「思う」「どちらかかといえは思う」と答えた割合が、1、2学年とも5割前後と低く、3年生だけが8割を超える結果となっている。このことは、縦割り活動や生徒会でリーダーとして活動したこと、人権をテーマにした演劇にそれぞれの生徒が役割を持って協力して取り組んだことなど、3年生は個々の存在が認められる機会が多いことによるものと考えられる。したがって、今後、生徒一人一人の活動の場面に目を向け、認め、評価することで、自己有用感や自尊感情の高まりにつなげていきたい。

6. 実践事例についての評価

- ・ 人権教育の全体計画により、学校として、組織的に取り組むことができたが、意識調査からは、1、2年生への取組について課題が残った。今後、2回目の意識調査を行い分析することで、年間を通じた人権教育の推進に努めたい。
- ・ 人権教育について、新たに取り組まなければならない難しいものという先入観があったが、人権教育という視点での活動を通して、これまで行ってきた活動が人権教育につながっていることが確認できた。
- ・ 人権教育に対する教師側の意識を更に高め、学校における教育活動を通じた人権教育の指導計画を再吟味し、人権教育の実践を継続していくことが必要である。

【人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント】

大船渡市立末崎中学校

学校づくりが組織的かつ効果的に進められている事例である。教育課程内の諸活動を人権教育の視点で見直し、生徒それぞれの存在を認める活動を通して、自分と他者を共に大切にす生徒の育成を目指す視点から、様々な工夫をしている。例えば「運動会縦割り活動」や「人権をテーマにした演劇への取組」などである。生徒の自主的な活動を促し、積極的に協力する態度や実践力を養いつつ、特にいじめ問題への取組により、人権意識の高揚を図り成果を上げている。